

白居易の青春と徐州、そして女妖任氏の物語

静永, 健

九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 助教授 : 中国文学

<https://doi.org/10.15017/9578>

出版情報 : 中国文学論集. 35, pp.31-45, 2006-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン : published
権利関係 :



白居易の青春と徐州、そして女妖任氏の物語

静 永 健

白居易という詩人は、その青年時代を、いったいどのように過ごしたのだろうか。如何なる青春の日々を送り、そして、如何にしてあの甘美な作風をみずからのものにしていったのであろうか。小稿は、白居易の「詩人としての成長過程」について、その一端を窺うべく考察したものである。

一 詩人の恋愛体験

詩人白居易の成長過程を考える上で、その恋愛体験は、今や彼についての伝記研究のほとんどが紹介する自明の事実となっている。なかんずく二宮俊博氏の「白居易の恋愛体験とその文学」²⁾は、このことに関する専論であり、次に題を挙げる九首の詩歌は、二宮論文が指摘する白居易の悲恋にまつわる作品群である。³⁾

- ・「夜雨」 文集卷十、〇四五―、元和六年（八一）、白40歳、下邳での作。
- ・「感鏡」 文集卷十、〇四七五、元和七年（八二）―八年、白41―42歳、下邳での作。
- ・「感情」 文集卷十、〇五一―、元和十二年（八七）、白46歳、江州での作。
- ・「潜別離」 文集卷十二、〇五九九、製作年等未詳（長慶三年以前の作）。
- ・「感秋寄遠」 文集卷十三、〇六一八、貞元十九年（八〇）―永貞元年、白32―34歳の作。
- ・「冬至夜懷湘靈」 文集卷十三、〇六六一、貞元十六年（八〇）―白29歳、或説貞元二十年33歳の作。

白居易の青春と徐州、そして女妖任氏の物語

・「寄湘靈」 文集卷十三、〇六九四、貞元十六年（八〇〇）、

白29歳の作。

・「夢旧」 文集卷十五、〇八四九、元和十年（八五〇）、

白44歳、長安での作。

・「寄遠」 文集卷十九、一二四八、長慶元年（八二二）、

白50歳、長安での作。

若き日のほろ苦く甘酸っぱい思い出が、却つてその青年の心をたくましく育み、やがて彼を颯爽たる好紳士に成長させてゆくという図式は、こんにちの我々にも十分納得できるものである。特に「長恨歌」「琵琶引（行）」をはじめとする白居易の詩文には、かかる過去の実体験無くしては手に入れ難いと思われるような豊かな感情描写があり、それが白詩全体の見どころの一つともなっている。

しかし、ここに無粋な意見を持ち出して恐縮であるが、たとえ如何に深刻に懊悩した青年がいたとしても、その人物が等しく「詩人」になるとは限らない。失恋の悲しみは、世の無数無限の青年・少女たちの心を傷めつづけてきたことは確かであるが、その中で、彼ら彼女たちが真に「文学に目ざめる」という可能性は、むしろ幾千幾万分之一のことも言うべき極めて僅少な数値でしかないはずである。果たして、青年白居易に失恋の過去があったことは事実であるとしても、その彼が、文学、特に詩歌創作に秀でた才能を育てゆく過程は、今後さらに検証してゆかねばならない多くの課題を残しているように思われるのである。

たとえば、白居易の前半生における自叙伝的散文「元九に与ふる書」（文集卷二十八、一四八六）によれば、彼は幼少期より「宿命的」な文字との出会いがあり、五六歳で詩の作り方をおぼえると、二十代、科挙に向けての厳しい勉学生活の中でも詩作を続け、やがて進士に及第し、もはや試験科目としての作詩訓練は無用となった後も、なお詩作を廃することは無かったという⁴。白居易を文学（詩歌創作）に目ざめさせた要素には、一に科挙の試験勉強、二に恋愛経験があったとして考えることは誤り無いとしても、更に幾何かの、彼と創作とを緊密に結びつけるもの（および体験）が、彼の青少年時代には存在したようにも推測されるのである。

かかる疑念に対し、同姓諸田龍美氏の論文「『白氏文集』に於ける『毛詩』の非諷諭的受容」⁵は、白居易の文学的素養の根底に、彼の生まれ故郷鄭州新鄭県が関係するのではないかという新見解を提出した画期的労作である。詩人は、確かに生まれ育った風土に多少なりとも影響を受けるものである。そこで、「鄭声は淫なり」とまで批判

された『詩經』鄭風の故地が、白居易のまさしく呱呱の声を挙げた場所であるということは、諸田論文によって再認識された事実である。しかも諸田氏の考証によれば、白居易の生まれた「新鄭東郭宅」（現在も東郭寺という寺院があるという）は、鄭風に詠われる有名な歌垣の舞台「溱洧」（溱洧二水の合流地点）とは約七・五キロメートルの至近な距離にあったとされる。鄭風「溱洧」の詩が、儒教の立場よりするいささか書生論的な批判とは別に、白居易の心の中では生まれ故郷の民歌として、またおおらかで健康的な古代の恋歌として認識されていたのではないかと、諸田氏の考察は、白居易の文学觀の形成過程を考える上で粗略には扱えない重要な指摘であると思われる。もし、白居易がこの中原の氣候穏やかな古詩の郷ではなく、たとえば北方の雄渾な秧歌の地域に生まれ育っていたならば、彼の文才はきつと全く異なつた方向に伸ばされていたことであろう。

しかし、諸田論文も言及するように、白居易が鄭州に起居した歲月は僅か十年であつた。建中三年（六三）数え十一歳の時、彼は鄭州を離れ、父白季庚の赴任先徐州に移り住むことになる。当時頻発していた各地の節度使と唐朝中央政府との対立紛争を避けるためであり、また前年の建中二年、父季庚が徐州の唐朝歸順に功が有り、以て徐州別駕を授けられたためでもある。白居易は、その十代から二十代半ばまでの最も多感な時期を、鄭州ではなく、直線距離で約三〇〇キロメートル東南方の徐州符離（現在の安徽省宿州市符離集、いま徐州市とは省境を跨ぐ）で過ごすことになるのである。白居易の青春を考えること、それは彼の徐州での足跡をたどることになるのである。

二 「重臣」張建封の治める徐州

そこで、以下白居易の徐州での生活について考察を進めてゆきたいが、これに関して、近年大変重要な指摘を含む論考が提出された。福本雅一氏「燕子楼と張尚書」である。この論文は、白詩「燕子楼三首并序」（文集卷十五）に見える「徐州故張尚書」とは誰かという問題に着目して、近年通説となりつつあつた「張愔（？）の？」とする説に対し、旧説の通りその父「張建封（二三）ハ〇〇」であることを辨証し、更に張尚書の愛妓盼盼（または晒晒）をめぐる白居易と張建封との關係にまで説き及んだものである。張建封・張愔父子の年齢や、当時の徐州の政治情

勢までも視野に入れた福本氏の分析には十分な説得力があり、筆者もこの説に左袒するものである。

そこで、この福本論文の指摘に従って、張建封在任中の徐州の状況を改めて検証してみると、それは文学青年白居易にとってまさに理想的な土地であったことが判明する。「旧唐書」卷一四〇に収められる「張建封伝」は以下のように記している（なお『新唐書』卷一五八所収「張建封伝」も簡略ながらほぼ同文である）。

初め建中の年（静補…二年）李洧徐州を以て（唐朝に）帰附せしむるも、洧は尋いで（まもなく）卒す。其の後 高承宗父子・独孤華相繼いで刺史と爲るも、賊の爲に侵削せられ、貧困にして自ら存する能はず。又た咽喉の要地にして、江淮の運路に扼れば、朝廷 重臣を拵びて以て鎮すること之れを久しくせんと思ふ。

すなわち「重臣」張建封の徐州赴任は、戦乱絶えぬ河南道南部の治安を回復し、更に水上交通の大動脈である淮河中流域を確保するためであり、唐朝中央政府の強い意向で実現した人事であった。「張建封伝」は続く。

貞元四年、建封を以て徐州刺史と爲し、御史大夫、徐・泗・濠節度、支度營田觀察使を兼ねしむ。既に軍伍を創置し、建封は触事躬親す。性は寛厚にして、人の過誤を容納するも、綱紀に按拠して、妄りに法を曲げて人に貸さず。事を言ふ毎に、忠義感激すれば、人みな畏悦す。

張建封の徐州着任は貞元四年（天八）、白居易十七歳の時に当たる。徐州の安寧は、ひとり張建封の温厚寛大で、かつ忠烈厳正な人柄によって保持されていたのである。「張建封伝」は更に、これによって彼が徐州在任のまま檢校礼部尚書（貞元七年）、次に檢校右僕射（貞元十二年）に特進し、また貞元十三年冬から翌年春にかけての上京の際には、徳宗皇帝による数々の異例の殊遇があつたことを詳細に記している。そして張建封の十三年間にわたる徐州在任期間を次のように総括している。

建封の彭城（徐州の別称）に在ること十年、軍州は理と称せらる。復た又またに賢下士を礼し、賢と不肖と無く、其の門に遊ぶ者あれば、みな之れを礼遇す。天下の名士は嚮風延頸し、其の往くこと帰するが如し。貞元の時、文人許孟容、韓愈の諸公の如きは、みな之れが爲に従事せり。

徐州における張建封は、下僚をいたわり、また来訪する知識人たちを快く迎え入れたので、天下の名士は拳つて徐州に集まつたという。二十代の青年白居易にとっては、まことに刺戟的な環境がそこに現出していたと言えよう。

ちなみに韓愈の徐州来遊は、建封晩年の貞元十五年（五九六）、韓愈32歳。この年、白居易（28歳）は宣城の郷試に及第。晴れて郷貢進士となつて張建封のもとを訪れた白居易を、寄食中の韓愈が目撃している可能性がある。

だが、この後、張建封は病を得て翌貞元十六年（八〇〇）在職のまま逝去。徐州の平和は一夜にして崩壊し、再び干戈鳴り止まぬ紛争地帯となるのである。息子張愔を留後とする暫定政府には、福本論文が考証する通り、もはや昔日のような安寧の訪れることは無く、また張愔も六年後の元和元年（八〇六）、その任を返上して京師に赴こうとした矢先、徐州境内で暴卒（福本氏は暗殺と推定）するのである。

白詩序文にいう「徐州故張尚書」とは紛れもなく張建封を指し、妓女盼盼は、やはり建封の愛妓であつたと思われる。しかるに筆者には、青年白居易と盼盼との間に、何事が秘めやかな感情の交流があつたかに見受けられる。

醉嬌勝不得 醉嬌勝へ得ざるさまは

風嫋牡丹花 風に嫋げる 牡丹の花か

とは、「燕子楼」詩の序文（〇八五九）中に引く白居易の逸句、十二年前に彼が盼盼に贈つた詩の一節という。しかしてその情景は、かの「長恨歌」の「侍兒扶起愁心嬌として力無し」や「金屋粧成りて嬌として夜に侍し、玉楼宴罷みて酔ひて春に和す」を彷彿とさせる。また何よりも「燕子楼」詩の第二首（〇八六一）に「霓裳の曲を舞はざるより…」とあるように、彼女は、かつて楊貴妃の秘曲たる霓裳羽衣曲の舞姫でもあつたのである。そこで更なる憶測を許されたいが、白氏が思いを寄せた「湘靈」とは、もしやこの盼盼ではあるまいか。

冬至夜懷湘靈

冬至の夜 湘靈を懷ふ

豔質無由見 寒衾不可親

豔質 見るに由無く、寒衾 親しむべからず。

何堪最長夜 俱作獨眠人

何ぞ堪へん 最も長き夜の、俱に独り眠れる人と作れるを。

（文集卷十三、〇六六一）

この詩は、前節にも示したように、貞元十六年（八〇〇）の作か、貞元二十年（八〇四）の作かの二説に分かれる。しか

白居易の青春と徐州、そして女妖任氏の物語

し、単に「過去の恋人を思慕する」詩というには「無由見」「不可親」の否定詞が強く響き過ぎるように思われる。また、白居易と彼女が、ともに「独眠の人」として夜を過ごすという解釈も、いささか判然としない。だがここに貞元十六年に没した張建封と、彼がこの世に遺した妓女たち、という構図を想定すると、この詩は単なる恋の詩では無くなってくる。というのも、『白氏文集』はこの湘霊の詩の次に以下のような作品を続けるのである。

感故張僕射諸妓

故張僕射の諸妓に感ず

黄金不惜買蛾眉 揀得如花三四枝

黄金惜しまず 蛾眉を買ひ、揀び得たり 花の如き三四枝。

歌舞教成心力盡 一朝身去不相隨

歌舞 教へ成さんと 心力を尽くせるに、一朝 身去れば 相隨はず。

(文集卷十二、〇六六一)

筆者は、この二つの詩の配列には何らかの必然性があると考えたい。あるいは、この二首は同時に詠まれたものではなかったか。張僕射が「黄金」を惜しまず、かつ「心力」を注いで育て上げた「花の如き」美妓たち、だが一旦幽明境を異にすれば、もはや「相隨は」せることも叶わない。一方それは、彼女たちにとっても同様であり、もはやこの世では主人の居ない「寒衾」に「独眠の人」となって耐えるしかないのである。なお、この解釈は「湘霊」という綽名にも符合する。この名は、もとより実名ではなく、『楚辞』遠遊篇の「湘霊をして瑟を鼓せしめ、海若をして馮夷を舞はしむ」に仮託された称谓であるが、この女神たちは、あたかも妓女のごとく歌舞音曲に秀でていた。そして何よりも、彼女たちは舜帝の死を悲しみ湘江に入水した二女（湘君・湘夫人）の神霊なのである。

白居易「燕子楼」詩には、

まだなお彼の青春時代のさまざまな記憶が封印されているようである。

三 詩人白居易の出发点——徐州符離

徐州刺史張建封、そして彼の遺した愛妓たち、また白詩に登場する謎の女性「湘霊」、これらと白居易との関係は、白居易自身が多くを語らないために不明瞭な部分が多い。それらは今以待考とすべきであるが、一方、それ以外の「二十代の記憶」は、白居易にとって忘れ得ぬものとして追憶されている。

元和四年（八五）三十八歳の白居易は、天子の側近たる左拾遺となつて、多忙な毎日を送つて来た。そんなある日、退朝する彼を待ち受けて、長安新昌里の白邸門前に佇む一人の男がいた。白居易徐州時代の友人「劉五」である。かつて符離県での交友グループの中で、その年長故にリーダー的存在であつた彼であるが、現在は某県の「主簿」として、今なお下積み^①の労苦に耐え続けていたのである。

醉後走筆。酬劉五主簿長句之贈、兼簡張大・賈廿四二先輩昆季

醉後の走筆。劉五主簿が長句の贈あるに酬い、兼ねて張大・賈廿四の二先輩昆季に簡す

劉兄文高行孤立 十五年名前翁習 劉兄は文高く行孤立^{ひび}り、十五年前 名は翁習たり。

是時相遇在符離 我年二十君三十 是の時相遇ひて符離に在り、我が年は二十 君は三十。

得意忘年心跡親 寓居同縣日知聞 意を得て年を忘れ心跡親しみ、同県に寓居して日に知聞す。

衡門寂寞朝尋我 古寺蕭條暮訪君 衡門^{むらかみ}寂寞たるも朝より我を尋ね、古寺蕭條として暮れに君を訪ふ。

朝來暮去多攜手 窮巷貧居何所有 朝來 暮去 多く手を携ふるも、窮巷 貧居 何の有る所ぞ。

秋燈夜寫聯句詩 春雪朝傾暖寒酒 秋灯 夜に写す聯句の詩、春雪 朝に傾く暖寒の酒。

陣湖綠愛白鷗飛 漣水清憐紅鯉肥 陣湖緑にして白鷗の飛べるを愛し、漣水清くして紅鯉の肥ゆるを憐む。

偶語聞攀芳樹立 相扶醉蹋落花歸 偶語しては閑に芳樹を攀ちて立ち、相扶けては酔ひて落花を踏みて歸る。

（文集卷十二、〇五八四、その第一句一十六句）

白居易は旧知の先輩をあたたかく迎え入れ、酒を酌み交わしつつ、久闊を叙した。この詩は七言一百句に及ぶ長篇であるが、その冒頭、十五年前の徐州符離県の様子が懐かしく思い出されている。忘年の交を終んだ「劉兄」と白居易は、互いに不自由な貧乏生活の中でも頻繁に交遊し、符離の名所（陣湖・漣水）を散策したり、春雪の朝に酒を飲み、秋月の夜に聯句の会を催した。二十代の白居易にとってこの「劉五」、そして詩題に見える「張大（張徹）」「賈廿四（賈餗）」らは、徐州における直接の先輩として、彼に少なからぬ影響を与えたと思われる。特に白居易が「長恨歌」など七言歌行に優れた才能を発揮するのは、十歳年長のこの「劉五」に触発されるところが大きかつたのではあるまいか。現に今も、劉五は白居易に再会するやいなや一篇の長句「行路吟」を示している。

白居易の青春と徐州、そして女妖任氏の物語

斂手炎涼敘未畢 先說舊山今悔出 斂手して炎涼叙べて未だ畢らざるに、先づ説ふ旧山今出でしを悔ゆと。
岐陽旅宦少歡娛 江左羈遊費時日 岐陽の旅宦 歡娛少なく、江左の羈遊 時日を費すのみ。
贈我一篇行路吟 吟之句句披沙金 我に贈る一篇の行路吟、之れを吟ずれば句句沙金を披くがごとし。

(同右、その第六十七句〜七十二句)

劉五來訪の意図は、今や大出世を果たした後輩を尋ね、権貴への推薦を請託に來たものである。白居易はそれを婉曲に謝絶しつつも、劉五の詩句を「砂金を撒いたようだ」と誉め称える。劉五は、今もなお詩人白居易の尊敬すべき先輩だったのである。そして、この詩の最終段近く、白居易は劉五に懐かしい符離県のその後の様子を尋ねている。沈みがちな話題を変え、失意の先輩を励ますために。

且傾斗酒慰羈愁 重話符離問舊遊 且く斗酒を傾けて羈愁を慰め、重ねて符離を話ひて旧遊を問はん。
北巷隣居幾家去 東林舊院何人住 北巷の隣居 幾家が去れる、東林の旧院 何人が住める、
武里村花落復開 流溝山色應如故 武里の村花 落ちて復た開くらむ、流溝の山色 忝に故の如くなるべし。
感此酬君千字詩 醉中分手又何之 此れに感じて君に酬ゆ 千字の詩、醉中 分手して又た何に之かん。
須知通塞尋常事 莫歎浮沈先後時 須らく知んぬ 通塞尋常の事、歎く莫れ 浮沈先後の時を。

(同右、その第八十七句〜九十六句)

「習作時代」とも言える白居易徐州符離での作品は、今ではほとんど残されていない。しかし、彼の詩人としての第一歩が、ここ徐州符離より始まったという事実は、その伝記研究の中で、一度は確認されるべきことである。白居易は「北巷の隣居」「東林の旧院」と、まるでここが彼の生まれ故郷であるかのように仔細に近況を問うているのである。

なお、この符離県に関する餘談として一言。現在この符離集より東南東方向六〇キロメートルのところに靈璧という小県がある。唐代も徐州境内であるこの場所は、かの項羽が奮戦した垓下の古戦場と伝えられる。また現在は虞美人の墳墓も祀られているとのことである。これに関連して想起されるのは川合康三氏の論文「長恨歌」についてである。川合氏は、「長恨歌」における楊貴妃縊殺の段の表現に『史記』項羽本紀に見える有名な「垓下の

歌」が援用されていることを指摘された。川合論文の趣旨は、詩歌の表現に用いられる古典語の連環性について注意を促すとするものであるが、垓下の故事が、白居易にとって「第二の故郷」の有名な伝承であるという事実も、川合氏の所説を更に有力に裏付けるものとなろう。白居易の出世作「長恨歌」には、この符離で過ごした青年時代の記憶がさまざまに活かされていると思われるのである。

四 淮河で語られた物語 「任氏伝」

唐代伝奇の傑作のひとつ「任氏伝」は、狐の変化たる女妖「任氏」と、貧乏書生の「鄭六」、そして鄭六の友人「韋壺」三人の物語である。白居易より一世代前輩の沈既濟の作。その内容の詳細は諸注釈に譲るが、この奇譚の特徴的な部分は、風采拳がらぬ貧乏書生鄭六が妖狐任氏に求愛し、驚くべきことに任氏がそれを受け入れ、その愛を貫き、最後は任氏が鄭六の懇願を聞き入れ、その任地への旅に同伴、途中、はからずも獬犬の餌食となつて落命するという構造である。中でも印象深いのは、狐であることを知られ逃げようとする任氏に鄭六が追いつき、切々とその偽りない心情を打ち明ける場面である。

鄭子遽呼之。任氏側身、周旋於稠人

中以避焉。鄭子連呼前迫。方背立、

以扇障其後曰、「公知之、何相近焉？」

鄭子曰「雖知之、何患？」

對曰「事可愧恥、難施面目。」

鄭子曰「勤想如是、忍相棄乎？」

對曰「安敢棄也。懼公之見惡耳。」

鄭子發誓、詞旨益切。

任氏乃迴眸去扇、光彩

鄭子遽かに之れを呼べば、任氏身を側して、稠人の中に周旋し以て避けんとす。鄭子連呼して前迫る。(任氏は)方に背きて立ち、扇を以て其の後を障りて曰く「公之れ(私が狐であること)を知る、何ぞ相近づかん？」と。鄭子曰く「之れを知ると雖も、何ぞ患へん？」と。(任氏)對へて曰く「事は愧恥すべし、面目を施し難し。」と。鄭子曰く「勤想することは是くの如し、忍くも相棄てんか？」と。對へて曰く「安敢ぞ棄てん。公に惡(嫌惡)せらるるを懼れしのみ。」と。鄭子誓を發す。詞旨は益に切なり。

任氏乃ち眸を回らして扇を去れば、光彩の艶麗なること初めの如し。

白居易の青春と徐州、そして女妖任氏の物語

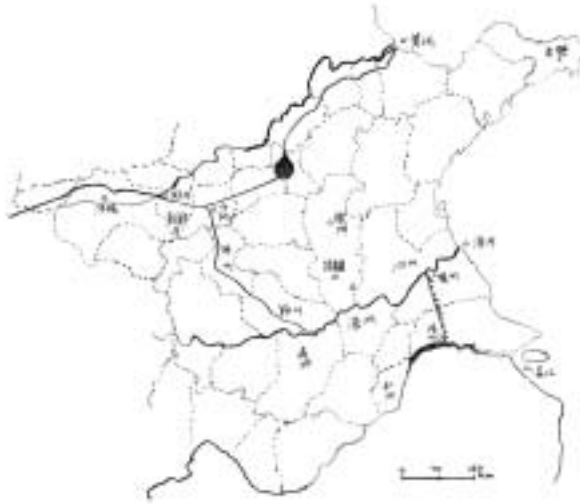
ところで、何故本稿に「任氏伝」が挿入されたかと言えば、この女妖任氏の故事を、若き日の白居易が知悉していた可能性があるためである。⁽¹⁹⁾ 妖狐との恋という奇抜な内容は、二十歳前後の白居易には必ずや強い文学的刺戟を与えたに違いない。また更にこの伝奇は、貞元年間の徐州一帯において、広く読まれていた形跡があるのである。

沈既済「任氏伝」の末尾には、この伝奇が文字化された経緯が詳しく記されている。

建中二年、既済は左拾遺より、金吾將軍裴冀・京兆少尹孫成・戸部郎中崔需・右拾遺陸淳とともに、みな東南に謫居せらる。秦（長安）より吳（江南地方）に徂くに、

水陸同道す。時に前拾遺朱放も旅遊に因りて随ふ。潁（潁水）に浮かび淮（淮河）を涉り、方舟は流れに沿ひ、晝は讖し夜は話ふ。各おの其の異説を徴むるに、衆君子任氏の事を聞きて、共に深く歎駭す。因りて既済に之れを伝ふるを請ひ、以て異を志せりと云。

時に建中二年（六二）のこと、沈既済は、裴冀・孫成・崔需・陸淳とともに江南の地方官に左遷された。宰相盧杞による一斉排除に遭い、既済は中央政界を逐われ、処州（いまの浙江省麗水）の司戸に遷されたのである。五人は各々赴任地までの陸路・水路を同道した。途中、前拾遺の朱放を加えて六名となった彼らは、潁州（いまの開封）より船旅となり、潁州（いまの安徽省阜陽）に南下、次に東流する淮河を下って楚州（いまの江蘇省淮安）、更に運河を南下して揚州へと向かった。そして、この「浮潁涉淮」の間、船中の無聊を「晝讖夜話」、つまり晝夜の別なく酒宴と談笑とによって慰め合うことになる。「任氏伝」は、この時沈既済が披露した奇譚であり、やがて同行者たちに



勧められるまま文章として書き留めることになったというのである。

ここでお手持ちの地図帳を参照いただきたいが、彼らが舟行した淮河は徐州南端を通る。特に符離はその沿岸を鎮護する徐州南部の要衝でもある。また、建中二年と言えば、白居易は十歳。残念ながら彼の徐州移住はその翌年になるが、父白季庚はすでに在駐し、そして前節に登場した符離の青年たち（中でも劉五は白居易より十歳年長）も既に大きく成長していたはずである。筆者はここに、若き日の白居易が彼らを介して「任氏伝」を読む機会があったことを想定したい。そしてそれは（時期は特定できないが）間違いなく徐州でのことであると確信するものである。

五 白居易幻の名作「任氏行」

白居易が何故「任氏伝」を読んだと言えるのか、そしてそのことは何を意味するのか。このことの詳細については、紙幅の都合上、本稿ではあまり多くを述べることができない。しかし、若き日の白居易にはこの伝奇をもとにした「任氏行」と題される幻の名作が存在した。⁽²⁰⁾ 現在それは我が国大江維時撰『千載佳句』に二聯四句と、そして中国宋代に編集された類書『錦繡万花谷』に二聯四句のみが残されているが、この詩こそは、白居易がここ徐州の地で詠じた作品の中の数少ない断片として、特に珍重すべきものであるうと思われる。

燕脂漠漠桃花淺

燕脂は漠漠として 桃花のごとく浅く、

青黛微微柳葉新

青黛は微微として 柳葉のごとく新し。

玉爪蒼鷹雲際滅

玉爪の蒼鷹は 雲際に滅え、

素牙黃犬草頭飛

素牙の黄犬は 草頭に飛びさる。

〔千載佳句〕人事部・美女、作品番号四四二

〔千載佳句〕遊放部・遊獵、作品番号八九七

蘭膏新沐雲鬟滑　蘭膏　新たに沐して　雲鬟滑らかに、
寶釵斜墜青絲髮　宝釵　斜めに墜つ　青系の髪。

(『錦繡万花谷』前集卷十七、美人)

蝉鬢尚隨雲勢動　蝉鬢は尚ほ雲勢に随ひて動き、
素衣猶帶月光來　素衣は猶ほ月光を帯びて來たる。

(右に同じく『錦繡万花谷』前集卷十七、美人)

おそらくこの「任氏行」は、本来「長恨歌」(全一二〇句)や「琵琶引(行)」(全八八句)と同様に七言歌行の長篇物語詩であつたと思しい。そして、これは白居易二十代の傑作として、徐州の人々の心をとらえ、やがて淮河の漕運とともに楚州や揚州などの江南諸都市にも伝わり、また一方、花の都長安の人々にも知られるようになったと考えられる。

この「任氏行」を中心とする筆者の考察は、改めて別稿を用意して報告することとしたい。⁽²³⁾

注

- (1) 白居易の評伝的著作の簡略な紹介として、静永には最近「唐詩人の知的生き方に学ぶ」(東方書店『東方』三〇七号、二〇〇六年九月)がある。
- (2) 二宮俊博「白居易の恋愛体験とその文学」(岡村繁教授退官記念論集『中国詩人論』汲古書院一九八六年)。
- (3) 本稿が引用する『白氏文集』は、巻数表示を那波本に従い、本文を宋紹興刊本に従い、更に細かな字句異同について適宜諸本を参照することとする。また作品番号は花房英樹『白氏文集の批判的研究』(叢文堂、一九六〇年)、作品繫年は花房氏上掲書と朱金城『白居易集箋校』(上海古籍出版社、一九八八年)等を参照。
- (4) 「元九に与ふる書」に「云く、僕　始生六七月の時、乳母　抱きて書屏の下に弄ぶに、無^レ字と^レ之^レ字を指して僕に示すこと有り。僕は口にいまだ言ふ能はずと雖も、心に已に黙識し、後に此の二字を問ふこと有れば、百たび十

たび其れ試むと雖も、之れを指して差ちがはず。則ち僕が宿習の縁、已に文字中に在り矣。五六歳に及び、便たちに詩を為るを学び、九歳にして声韻を暗識す。十五六にして始めて進士有るを知りてよりは、苦節して読書す。二十已来、昼は賦を課し、夜は書を課し、間に又た詩を課し、寢息するに暇いとがあらず矣。以ゆに口舌に瘡かさを成し、手肘に胼たこを成し、既に壯なるに膚革は豊盈ならず、いまだ老ならざるに齒髪は早こに衰白、瞽瞍然として飛蠅・垂珠の如きが眸子中に在ること、動もすれば万を以て数ふるに至る。蓋し苦学力文の以て致す所なれば、又た自ら悲しめり矣。家貧にして故多こく、二十七にして方く郷試に従ふ。既に第するの後は、科試を専らにすと雖も、亦た詩を廢せず。」と。

(5) 諸田龍美「白氏文集」に於ける「毛詩」の非諷諭的受容（九州大学文学部『文学研究』第九十六輯、一九九九年）。

(6) ただし各年譜研究が指摘するように、白居易は符離に必ずしも定住していたのではない。翌建中四年（七六三）には早くも戦乱のために江南に避難。また貞元二年（七六六）「時に年十五」との自注のある「江南にて北客を送り、因憑して徐州の兄弟に書を寄す」詩（文集卷十三、〇六七〇）があるように、白居易一人が旅に出ている時期もあつたようである。更に貞元十年（七九四）襄陽での父の死、貞元十五年（七九九）宣城郷試の受験など、幾つかの不在時期も確認される。だが、白居易の徐州時代は、最終的に貞元十七年（八〇一）春30歳まで続くと考えたい。白居易の父白季庚は、貞元四年に襄陽転勤となるが、その後も白居易の「六兄」がこの符離の家を守っているためである（参照「符離の六兄を祭る文」、文集卷二十三、一四四六）。

(7) 福本雅一「燕子楼と張尚書」（早稲田大学中国詩文研究会『中国詩文論叢』第二十二集、二〇〇三年）。

(8) 張建封の徐州派遣について、『資治通鑑』唐紀・徳宗貞元四年の条に、宰相李泌の建言が見える。しかしこの条文は貞元四年の最も末尾に掲げられており、年月を特定できない。しかし、この配列に従うならば、張建封の徐州刺史任命は、貞元四年の年末になるかもしれない。

(9) では白居易が何故「燕子楼」詩の序文において、事実を歪曲して「校書郎為りし時」と称したのか。福本論文は、進士科応試前の白居易が張建封の歓待を承け、さらに在京有力者への推輓を受けたことを隠蔽するためだとするが、この点、筆者にはいまだ承伏し難い疑念が残る。白居易がみずからの履歴をいつわり「校書郎」という後年の官職名を故意に書き入れた理由は、当時すでに「一人前の官僚だった」と主張することで、盼盼とは「妓女と客以外の

白居易の青春と徐州、そして女妖任氏の物語

何ら特別な関係は無い」ことを単に強調したかったためではないだろうか。

- (10) 湘霊については、入谷仙介「白居易と女性」(帝塚山学院大学中国文化会『中国文化論叢』第二号、一九九三年)のほか、橘英範「恋人・妻・妓女 貞元末―元和初年の白詩より」(帝塚山学院大学中国文化会『中国文化論叢』第十一号、二〇〇二年)、および同氏「白居易の詩と湘霊」(大阪大学『中国学志』随号、二〇〇二年)参照。
- (11) 朱金城『白居易集箋校』(上海古籍出版社、一九八八年)によれば、『白氏文集』中に見える「劉五」(名未詳)に関する詩歌は、この「酔後走筆」詩のほかに「景南花下醉中留劉五」詩(文集卷十三、〇六四〇、元和二年、盤屋での作)、「送劉五司馬赴任歙州兼寄崔使君」詩(文集卷六十四、三二三六、太和八年、洛陽での作)がある。
- (12) 張徹については、前注に同じく朱金城『白居易集箋校』によれば、「鄧魴張徹落第」詩(文集卷一、〇〇四四、元和三年の作)のほか、「張徹宋申錫並可監察御史制」(文集卷三十一、一五一四、長慶元年の中書制誥)があるほか、韓愈に「答張徹」詩と「故幽州節度判官贈給事中清河張君墓誌銘」、また李賀に「酒罷張大徹索贈」詩の存在が指摘されている。
- (13) 賈餗については、前注に同じく朱金城『白居易集箋校』によれば、「看常州柘枝贈賈使君」詩(文集卷五十三、二二三五九、長慶四年の作)のほか、文集卷五十四「宝曆元年」二年の作品に「赴蘇州至常州答賈舍人」詩(二四二六)、「自到郡齋」詩(二四二二)、「戲和賈常州醉中二絕句」(二四四八・四九)、「夜聞賈常州崔湖州茶山境會」詩(二四六〇)がある。また『旧唐書』卷一九九、『新唐書』卷一七九に伝がある。
- (14) この「酔後走筆」詩は、現在全文七〇三字である。元來は更に四〇句程度の詩句が存したかもしれない。
- (15) 現在『白氏文集』中で明らかに符離での作と確認できるものは卷十三の「乱後過流溝寺」詩(〇六五六)、「題流溝寺古松」詩(〇六八八)の僅二首である。ただし前詩には「九月徐州新戦後」とあり、後詩にも「死却題詩幾許人」とあり、貞元十六年夏の張建封死歿直後に起こった内戦を詠ずるものように思われる(参照「哀二良文」、文集卷二十三、一四四四)。
- (16) 川合康三「長恨歌」について(同氏著『終南山の変容 中唐文学論集』所収、研文出版、一九九九年)。また静永「教材としての『長恨歌』論」(田部井文雄編『漢文教育の諸相』所収、大修館書店、二〇〇五年)参照。

- (17) 沈既濟の生卒年は未詳。しかし息子沈伝師の生年は大曆四年(七六九)であり、白居易の大曆七年(七七二)に近い。
- (18) 汪辟疆校録『唐人小説』(上海古籍出版社、一九七八年)、今村与志雄訳注『唐宋伝奇集(上)』(岩波文庫、一九八八年)、黒田真美子『中国古典小説選5』(明治書院、二〇〇六年)等を参照。
- (19) 特に先の引用文中の末尾、任氏の美しさを描いた「回眸去扇、光彩艶麗如初」という表現は、「長恨歌」の「回眸一笑百媚生」の一句を思い起こさせる。
- (20) 太田晶二郎『白氏詩文の渡来について』(『太田晶二郎著作集』第一冊所収、吉川弘文館、一九九一年)および植木久行『千載佳句』所収白居易詩逸句考(上)、『白居易研究年報』第二号、勉誠出版、二〇〇一年)参照。
- (21) 底本は『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書・文学篇第二十一巻』所収『千載佳句』(臨川書店、二〇〇一年)とし、作品番号は金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集・千載佳句篇』(培風館、一九四三年)による。
- (22) 底本は明嘉靖刻本を影印する『錦繡万花谷』(上海辞書出版社、一九九二年)による。
- (23) 静永『白居易』任氏行考(九州大学大学院人文科学研究院『文学研究』第一〇四輯、二〇〇七年三月)予定。